

平成 19 年身近な野生生物の観察事業準備会 議事要旨

日時：平成 19 年 8 月 24 日（金）10：00～16：00

場所：財団法人日本環境協会 第 1・2 会議室

出席委員：青山 博昭、井口 泰泉、齊藤 秀生、戸田 光彦、
花里 孝幸、福井 行雄、安間 繁樹 敬称略
参加クラブ代表者：28 団体中 20 団体出席
環境省：木村 博承、高岡 志帆、齊藤 弘毅
オブザーバー：川嶋 之雄（日本エヌ・ユー・エス（株））
事務局：塚腰 光男、大西 亮真、田代 幸子

議題：

1. 野生生物の観察事業主旨説明
2. 指導委員及び団体自己紹介
3. 調査方法説明
4. 観察調査方法説明及び連絡事項
5. 指導委員からのアドバイス等

議事要旨

1. 野生生物の観察事業の主旨が環境省から説明された。
2. 各委員、各団体 5 分程度でパワーポイント等の資料を用いて団体の自己紹介が行われた。
3. 事務局より、調査書類、調査方法等についての説明が行われた。
4. 観察調査に関する質疑応答が行われた（別添 1 参照）。
5. 指導委員からの注意点・アドバイス等があった。（別添 2 参照）

（資料一覧）

- | | |
|------|--|
| 資料 1 | 観察指導委員名簿及び環境省・事務局名簿 |
| 資料 2 | 観察事業参加団体名簿 |
| 資料 3 | EXTEND2005 における身近な野生生物の観察事業について |
| 資料 4 | 身近な野生生物の観察のポイント |
| 資料 5 | 調査書類 5-1 <身近な野生生物の観察調査実施要領>
5-2 <計画シート>
5-3 <中間報告シート>
5-4 <調査票>
5-5 <レポート用紙 >
5-6 <アンケート用紙> |
| 参考 1 | 身近な野生生物の観察調査 Q&A |
| 参考 2 | メーリングリスト開設のご案内 |
| 参考 3 | 観察調査キットの送付について |
| 参考 4 | スポーツ安全保険案内パンフレット |
| 参考 5 | 熱中症保健指導マニュアル |
| 参考 6 | 平成 18 年度身近な野生生物の観察報告書 2 種 昨年度参加団体は会議後回収。 |
| その他 | ： 参加団体からの提供資料。 |

観察調査Q & A

Q.最終報告のまとめ方は、教育的観点でプロセスを大事にするということで子どもたちが間違っても自由に書かせるのがいいのか、サポーターから指導して考察的観点で書いたらいいのか？

A.(環境省)教育的観点により参加者が自由に記載することも大事だが、指導委員に確認いただく手前、代表者は記載方法について参加者に指導いただきたい。指導委員にコメントをもらえるのは貴重な機会である。

Q.メーリングリストについて昨年度あまり活用していなかったようだが、音頭をとったり調整を図ったりはしないのか。

A.(環境省)今のところML上で事務局が調整をすることは行っておらず、各団体の方にご自由に活用して欲しい。要望が多ければ検討していく。

Q.1回ごとの観察レポートを提出する形式になっているが、これでは継続的な変化に関する考察を書きづらい。また前回からの変化がないときはどうすればいいのか。

A.(事務局)継続的な観察の中で確認された変化については是非記載いただきたい。また繰り返し調査していくことに意義があるので変化がなくても調査結果として記載いただいてOK。

Q.セミの抜け殻調査結果報告は40日分1回にまとめて書いてもいいか？

A.(事務局):1回にまとめていただいた方が良い。表などにまとめて書いて欲しい。

Q.:昨年考察も含めていいのか？考察のレポート用紙を増やすべきでは？

A.(環境省)調査票やレポート用紙に書いていただければと思う。

A.(委員)レポートを見る立場から言うと、子どもの観察日記という形ではないもので、経年経過や、個体数、その同定、考察なども書いて欲しい。4、5月から始めている場合はそれも付けていただきたい。

Q.1.カワニナとホタルの幼虫を他の場所で放流したいため提供してほしいとの連絡があるが、他の場所に移動させることが生態系に及ぼす影響は如何か。

2.大洪水時に、ホタルが少なくなっている。生態系にどのような変化が起きているのか？カワニナ等水生生物も少なくなっている。

3.流しそめんの樋のような装置を用いて、洪水時の水流がカワニナに及ぼす影響をはかる実験を行おうと思うが如何か？

A.(委員):1.ホタルは移動させないのが基本スタンス。人手によって強制的にそのようなことをするのは、生態系を崩すことになる。ご当地のカワニナを増やす努力をしてくださいと説明していただければと思う。

2.天災は、自然の流れの中で起きている。これは、自然の摂理なので、おそらく河川生物が急にいなくなるということもありえるが心配しなくてOK。

3.実験はいいが、自然の複雑さとは異なる単純化された結果が出て来るので工夫が必要。

Q.壁新聞とはどんなものか？

A.(事務局):子どもエコクラブの1年の活動成果として、壁新聞を定型の大きさにまとめることになっている。子どもエコクラブの全国フェスティバルの中のプログラムにこの壁新聞セッションが入ってくるので、全国フェスティバルに参加する代表クラブには壁新聞を作成していただく。

Q.アンケート用紙質問項目は難しい。子ども用はないのか？

A.(事務局):環境省と検討して対応する。

Q.:希少種の棲息場所など、公開しないで欲しい情報もあるのだが、この報告書は基本的にクローズドなのか？

A.(環境省):報告書は、公開の委員会や国会図書館に提出し、公開の資料となるので掲載可能な写真を使用したい。昨年度の報告書では、地図を非掲載にする等して、事務局側で配慮した。

Q.:提出する各シートはメールで送ることも可能ということだが、フォーマットは事務局に問い合わせればいいのか？

A.(事務局):HPで一式ダウンロード可能なので、HPをご確認いただきたい。HPからのダウンロードが難しい場合は、事務局に問い合わせたい。

Q.報告書を正確に書いて欲しい。子ども報告書のP22の写真の説明にドジョウと書いてあるが、写真を見たところドジョウではないし、提出した団体は「提出したシートにこのような記載をしていない」と言っている。P30の清水川の

ルビが「しみずがわ」と書いてあるが、正しくは「しょうずがわ」である。P57 の戸田指導委員のコメントでスケッチが力作とあるが、スケッチのイラストがないなど配慮に欠けていると思われる。最終確認を取っていただきたい。

A.(事務局)大変失礼した。以後気をつける。

Q.セミの抜け殻調査の際、場所によっては取れる個数が違うのだが方法に問題があるのか。

A.(環境省)複数の地域を同時に調査するのもいいし、特定の地域を継続的に調査するのもいい。今のこどもたちの段階にあわせて調査を継続していただきたい。

A.(委員)まず目的は何かをきちんと定め、それにそった観察・考察を行って欲しい。ある一定の面積、ある一定時間、一定距離、など定量的に出来る範囲で比較を行うと良い。可能ならば季節変化をみると良いと思う。

Q.干潟観察をしているが生き物が自分で泳いでくるのか、人の手によって移動しているのかが不明なのだが。

A.(委員)自分の住みやすい環境に定着する。あさりのように泳げない生物は自らの力で移動するとは思えない。

A.(委員)ハツカネズミは人が移動させたのか、自ら移動してきたのかは、未だに完全にはわかっていない。だからこそ、それを考察するのが面白い。難しいだけに面白いということ、参加するこどもたちに体感してもらいたい。

Q.セミのメスが多くなっているのは農薬と関係しているのか考察するため、他の場所でも比較用に観察調査を行っている。その結果、セミのメスの数が場所によって違う結果が出た。15分で60匹近く見つかる場所と15分で3匹くらいしか見つからない場所がある。データとしての信頼性は如何か？また標高はどのように調べればいいのか？

A.(委員)調査の目的は？数を比較したいのであれば、清掃なども考慮しないとけない。

A.(委員)オスメスの比較は大変難しい。始めは、15分ずつ複数箇所定量的調査を繰り返し行い、地域でなにが起こっているのかを考察するといいい。アブラセミとニイニイゼミ、ミンミンゼミ、ヒグラシ等のセミの種類観察も調査結果の1つである。セミのオスメスが偏っているというデータは珍しいので、その調査をするのは面白い。標高は市販の地形図や日本地図センターのHPでわかる。

Q.フクロウは数が少ないので、個体数量観察は調査に含むことができないのだがそれでもいいのか？

A.(委員)猛禽類は観察の対象としては大変難しく、時期的にも、難しい。2・3月だと、一定時間、一定面積、一定距離で鳴く声、落ちて羽を観察調査するというのもできる。

A.(委員)特定の種・個体を追いかけていくことも大事。まず個体識別から始めてはどうか。数は少ないなりに、行動の変化、行動範囲を調べるのも興味深い。フクロウのペリット(嘔吐物)を分析するのもいい。

指導委員からの注意点・アドバイス

・皆さんの方がフィールドでの生き物についてはよく知っている。実験室の中で、統計的に考える確率論の立場からの助言などでは、役に立てるかと思う。

・P55の番のルビは「ばん」でなく「つがい」。報告書など事務局はミスをしないように注意して欲しい。

・それぞれのエコクラブの状況で判断した方がいいと思うが、報告書用には、少しがんばって考察文章をかいでもらう方がいいと思う。
フィールド調査に関してなにか助言が必要であれば協力する。

・その調査区域の昔の状況を、地元の人に聞く、昔の地図を調べるなど、長めの時間スケールを取り入れるということも考えてみて欲しい。

・一般に多くの方は、水はきれいであればいいと思っているが、濁っているのは有機物・生物がたくさんいるということである。生き物を大事にするためにもっと清掃すればいいということはない。ホタルを積極的に放流するというのは、生態系のバランスを崩すことにもなるのでそれも知っていて欲しい。

・生態学の分野は結果が出るまで大変時間がかかる。子どもたちの興味を継続させることは難しいが、成人しても生き物に興味を持ち、特定の生き物に関してスペシャリストになるような興味の持たせ方をしてほしい。

・子どもたちが楽しみながら、一人でも多くの参加ができるようにして欲しい。できるだけこどもにまとめて欲しいし、考察などもして欲しい。観察調査のプロセスも大事ではあるが、結果が間違った覚え方をしていたら困るので、委員の立場から間違っている場合は訂正していただきたい。